

日本学術会議公開シンポジウム
「教育データの利活用の動向と社会への展開」
(October 17, 2021)

高大接続からみた 教育データの利活用

吉田 文
(早稲田大学)

アウトライン

1. 高大接続の3局面
2. 入学者選抜
3. 生徒・学生の教育機関の移動
4. 教科と学問の関係
5. 能力の測定という問題
6. 附属校の可能性
7. 大学とIR
8. 課題と可能性の先の課題

1. 高大接続の3局面

心理学・教育学委員会「高大接続を考える分科会」

1. 入学者選抜
2. 生徒・学生の教育機関の移動
3. 教科と学問の関係

* 課題：入学者選抜から教育接続へ

* 各局面での教育データの存在、利活用、効果について検討

2. 入学者選抜

<存在するデータ>

- センター試験・大学入学共通テスト：高卒者の半数程度が利用
- 調査書：高校ごとの差異、大学の重視の程度の差異
- 推薦、AO：大学入学者の半数
- 予備校の模試データ：偏差値として有効
- （高大接続テスト、達成度テスト（基礎レベル）：実現していない。）

* 生徒の個票として利用できるデータはない。

* 入学者選抜は、入学志願者の学力を同一の評価で測定するものではない。

3. 生徒・学生の教育機関の移動

<存在するデータ>

- 大学生に対する振り返り調査：学生の主観による回答。在学した高校を客観的な指標で評価する手段がない。
- 高校での学習の習得度：評定平均は高校内のデータ。高校間の比較はできない。
- 調査書：信頼性が高くない。

* 日本の高校生全体の学習成果を比較できるデータはない。

* 高校までの学習と大学の学習を区別する必要。

4. 教科と学問の関係

<課題>

- 教育内容：高校の学習指導要領と大学の学問（discipline）の関係は複雑。
（cf. 学術会議の参照基準：大学の専門分野での教育内容は提言しているが…

<https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigakuhosyo/daigakuhosyo.html>)

- 履修者の大学での専門によって、高校での学習の持つ意味、大学での履修の持つ意味が異なることを含んでデータ収集ができるか。

（eg. 工学部機械工学科進学者と文学部歴史学科進学者にとっての、高校の歴史教科、大学の教養教育の歴史科目の持つ意味の違い）

5. 能力の測定という問題

- 高校の学習指導要領

「主体的・対話的で深い学び」

学力の3要素：①知識及び技能、②思考力・判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等

- 大学のアドミッションポリシー

「受け入れる学生に求める学習成果（学力の3要素）」

「学力の3要素を多面的・総合的に評価するための適切な評価方法の活用」

* 能力や意欲・態度での高大接続を求めているが、それらは信頼性・妥当性をもったデータとして測定できるのか。

6. 附属校の可能性

- 大学の附属校と大学（高卒者の多くが当該大学へ進学するケース）
 - * 附属校出身者が当該大学へ進学できるシステムは日本に特有
- 生徒・学生の移動、教育内容の妥当性の両方を検証できるモデル・ケース

<可能性>

- 生徒・学生の高校・大学の学習記録の分析
- 附属校出身者とそれ以外の高校出身者との比較
- 附属校のメリットを活かした教育

<課題>

- 高校の反対

7. 大学とIR

- 大学におけるIR：学習成果の可視化という政策主導で進められている。大学も教育改革の証明としてその利用を考えている。

<存在するデータ>

- 学生調査：学生の主観的回答
- 教務データ：学生の客観的な学習履歴

<課題>

- 入試データも含めた、上記両者の統合に対する、個人情報問題
- 学内の合意をどのように得るか
- それをどのように利用するか

8. 課題と可能性の先の課題

<課題>

- 高大接続を包括的に捉える教育データはない

<可能性>

- 大学とその附属校
- 大学のIR

<その先の課題>

- データの妥当性：課題に対して適切なデータが取得できるか。数値化できるデータしか集めない。
- データの信頼性：教育機関間の差異を越えて比較できるデータが構築できるか。
- データの有効性：データを何に有効利用するか。個別学習支援/機関の教育改善。